

かるがも



第24号

発行所 千葉県こども病院
〒266-0007 千葉市緑区辺田町 579-1
TEL 043-292-2111
FAX 043-292-3815
<http://www.kodomo.umin.jp/>

新年のご挨拶



病院長 伊達裕昭



平成22年新春のご挨拶を申し上げます。

昨年は春から暮れに至るまで、新型インフルエンザの問題が日本中を不安と混乱に陥れた一年でした。ウィルスの種類が豚インフルエンザ(H1N1)で、重症化する患者の割合も想定より低かったことから、ワクチンの供給とともにどうやら最悪のシナリオは回避することができたようです。今回の騒ぎは、新しい感染症が世界の何処かで発生した場合、日本への侵入と拡がりは何をしても免れないという事実を明らかにしました。またワクチン供給の方針と体制を巡っても指示が錯綜し、医療現場も混乱した結果、そのつけが国民に回される形になりました。この騒動を教訓に、今後の新しい感染症の流行やワクチン対策に国としてどう対応すべきか、行政はいまその見識と手腕が問われているように思います。今年はいこうした新たな疾病に対する心配の無い、穏やかな一年になるように願っていますが、引き続き体調の自己管理には充分ご配慮下さい。

新

暮れに発表された平成21年を表す漢字は「新」でした。この決定には、「新型」インフルエンザとともに、民主党による「新」政権の発足が大きく働いたように思います。その後、公開の席で行われた各省庁管轄の多くの事業に関する仕分け作業での必要・不要のやり取りも、これまでにない目新しいものでした。未来の日本のために、限られた予算をどの分野にどの程度使うのが良いか、それを決定する方法と段取りについてはいろいろな意見があるでしょう。しかしこの仕分け作業を通して、自分たちが行っている事業の重要性については誰もが理解してくれるはずだ、という安易な思いこみは通らず、関係者以外にも事業の必要性を納得してもらうための十分な説明を行う責任がある、ということをおぼろげに強く感じました。

千葉県も1月に病院局長が交替した後、4月に森田新知事を迎え、「新」の文字にふさわしい一年でした。当院では運営方針およ



び陣容、体制に大きな変化はありませんでしたが、新たな試みとしては、「こども家族支援室」に専任の副看護部長を配置して、療養が長期間におよぶ患者さんの生活の質向上のための検討を組織的に開始したことが挙げられます。この部署には、看護師の他にメディカルソーシャルワーカー(MSW)、臨床心理士、病院保育士、チャイルドライフスペシャリスト(CLS)、クリニクラウン(臨床道化師)、ボランティアの人などが属します。この人達は、病院の中で患者さんの診断や治療に直接携わるわけではありません。しかし、病院という特殊な環境の中でもどうすれば日常のこどもの生活を継続できるか、またこどもの療養、闘病に際して関係者と連携して病院がどのような支援を提供できるか、を考えるための部署として重要な役割を担っています。これまでもこうした活動は個々のレベルでは行われていましたが、それを院内の組織的な事業として位置付けたわけです。

入院中のこども達が笑顔で過ごすことができれば、病気と闘う力も増すに違いない。こどもが笑っていれば、それを見た家族も勇気が湧くに違いない。大変な闘病でも支援の方法が見つければ前向きに取り組めるに違いない。そうした思いで職員は業務に専心しています。しかし一方で、もしもこれが事業仕分けの席に出された場合には、どのように評価されるのだろうかとも考えてしまいました。闘病するこども達の生活の質向上のために病院として当然のことと理解いただけるのか、それとも、病気のこどもの前で笑いなど不謹慎だとお叱りを受けるのか。人手にかかる費用対効果を検証して再検討と言われるのか、それとも、それは急性期病院がしなければいけないことですかと中止を求められるのか。医療に対する考え方は人により、立場により様々です。考え方が異なれば、費用をかける対象の優先度もまた異なってきます。当院が正しいと信じて行っている医療に関しても、広く県民の皆様にご理解いただけるように説明する必要性は疑うべくもありません。しかし一方で、すべての人が医療に興味があるわけではなく、すべての人が冷静な判断力を持っているとも限りません。はなから理解するつもりが無い人には、どれだけ言葉を尽くしても意図は伝わらないでしょう。事業仕分けの過程を垣間見て、説明責任ということについて考えさせられた年の暮れでした。

これからも可能な限り情報の提供に努めながら、引き続きこどもの視点に立った医療を継続することができるよう、職員一同は力を尽くします。

本年もより一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

平成22年1月

